

男性探偵ロミオ『ジュリエット殺人事件』

作・演出 春田鮎



キャスト

葉山露滯(はやまろみお)・・・女は捨てた貧乏探偵
江口慧(えぐちけい)・・・相棒 女大好き
一条麗人(いちじょうれいと)・・・クラブ『ジュリエット』No.1ホスト
葬町日暮(そうまちひぐれ)・・・新米のホスト
外浦夜風(そとうらよかぜ)・・・みんなに慕われる兄貴的ホスト
鹿島竜樹(かしまりゆうき)・・・管轄の刑事
愛内長閑(あいうちのだか)・・・自殺していた行方不明者
愛内星華(あいうちせいか)・・・長閑の弟 捜索の依頼人
一条雷人(こうがみらいと)・・・班グレのボス 麗人の弟
シエクスパア・・・雷人の親衛隊 冷酷無比

●プロローグ

露濤 N 「俺は葉山露濤。これでも一応、探偵業を営む個人事業主だ。とはいえ一度も税金を払ったことは無い。なんでかって？言いたかないけど、仕事が無いからだよ！ふん・・・。たまに来るのは浮気調査と身辺調査。最近じゃ迷い犬の捜索まで引き受ける始末だ。これじゃほとんど便利屋だぜ。かっこわる・・・。相棒の名は江口慧。女子高時代の悪友さ。え？間違いないよ、女子高って言ったんだ。つまり俺たちは、生まれた時は女だった。だけど、もはや女は捨てた。理由？聞くじゃねえよ。これだけ覚えておいてもらえれば十分さ。俺の名は男装探偵ロミオ！」

転換 M

●第一幕 依頼

事務所であらだと過ぐす露濤と相棒の慧。

露濤 「ハァ、退屈だな・・・」

慧 「ため息ばかりついてるなよ。あ、これからため息一回につき100円ね」

露濤 「アホか、ガキじゃあるまいし。なんか腹減ってきた。ハァア」

慧 「はい、100円、ほら早く」

露濤 「やめろよ・・・おい、勝手に人の財布」

慧 「しけてんなあ、1, 2, 3, 三千円と217円。これが大人の財布の中身か？」

露濤 「うるせえ、お前だって似たようなもんだろうが」

慧 「んふふふ」

露濤 「なんだよ？何笑ってんだよ？」

慧 「じゃーん！これを見ろ！」

露濤 「あ？・・・あ、おまえそれ、まさか」

慧 「恐れ入ったか、これこそが我らの救世主、万馬券様だー！」

露濤 「おー！それで？いくら付いたんだよ？」

慧 「ふふふ、知りたいか？」

露濤 「知りたい！」

慧 「では教えよう。ジャカジャン！27600円だー！」

露濤 「スゲー！えらい！慧、お前ってやつは、俺は昔からお前は必ずやる男だと、いや昔は女だったけど、まあどっちでもいいとして、いやー良かった、これで三日ぶりにまともな飯が食える。それどころか温泉ぐらいは行けるなあ。それで、いくら買ったんだ？馬券」
慧 「100円」

露濤「1000円！？お前、1000円じゃ配当27600円じゃん？」

慧「そうだな。でも飯食えるだろ？」

露濤「かー・・・せめて10000円買っとけば276,000円になったんだぞ！？あー、やっぱり昔からは俺はお前は絶対しくじる男だと、いや昔は女だったけど、あーもういいんだよそれは！・・・チッ、ガツカリだ！ハア〜」

慧「あ、ため息。また1000円ね」

露濤「うるせえ！」

ドアが開き、誰かが入ってくる。

星華「すみません・・・いいですか？」

露濤「はい・・・何か？」

星華「ここ、探偵事務所じゃないんですか？」

露濤「はい、まあ」

慧「馬鹿、客だよ！あ、どうぞどうぞ、何かご依頼ですか？あ、まずはご相談だけでも」

星華「兄を・・・兄を探して欲しいんです」

露濤「お兄さんを？」

暗転

慧「お茶どうぞ」

星華「ありがとうございます」

露濤「じゃあ、これに名前と連絡先を書いてもらっていいかな？」

星華「わかりました」

慧「愛内・・・星華くんね」

星華「はい・・・」

露濤「それで？お兄さんはいつからいなくなっちゃったんですか？」

星華「連絡が取れなくなってもう一月になります。僕は実家で暮らしてるんですけど、兄は半年前から独立して一人暮らしをしてたので、ほとんど会ってはいなかったんですけど」

慧「仕事で出張中とか、友達とか恋人のところにいるとか、そういう事は無いの？」

星華「無いと思います」

露濤「どうして？」

星華「兄は個人で株のトレーダーをして生計を立てていました。家から出る事も少なくて、それに友達もほとんどいなかったんです。まして恋人なんて」

露濤「警察には？」

星華「搜索願は出しました。だけど」

慧「事件にでもならないと警察は動かないからね」

露漚「・・・分かりました。お引き受けします。どうなるか分からないけど、お兄さんの搜索、やってみましょう」

星華「ありがとうございます！お願いします！」

露漚「まずはお兄さんの部屋を見ることはできますか？」

星華「一度だけ行ったことがあるので、管理人に頼めば多分大丈夫だと思います」

暗転

愛内長閑のマンション。

慧「へー、でっかいマンションだなあ。やっぱり株は儲かるのかな？馬やめて株始めようかな」

露漚「やめとけ、お前には無理無理」

慧「なんで？」

露漚「元手が無いからだよ」

慧「あ、そっか」

星華「どうぞ」

露漚「お邪魔します」

慧「ひやー、見晴らし抜群！こんなところに住んでみたいなあ」

露漚「ちよっと色々見てもいいですか？」

星華「はい、お願いします」

慧「郵便物はダイレクトメールがほとんどか。留守電は、無しと」

露漚「パソコンのメールを見てもいいですか？」

星華「はい、いいですよ」

露漚「うーんと・・・たしかに最後の既読は1か月前だね・・・」

慧「戸棚あけてみてもいい？」

星華「はい」

慧「ここは仕事の資料ばかりだな」

露漚「収納はここだけかな？」

星華「廊下の奥にもうひとつ、ドアがありますけど」

露漚「見せて」

暗転

奥の部屋のドアを開ける、露漑と星華。

露漑「ウォークインクローゼットか・・・おい、慧！ちょっと来てくれ！」

慧が来る。

慧「どうした？でかい声出して・・・なにになに？お」

露漑「お兄さん、恋人がいたのかな？」

星華「わかりません・・・」

露漑「洋服に靴、こっちはバッグか」

慧「ちよつとしたハリウッドセレブだな」

露漑「ああ。すべて高級な女性用だ」

星華「どういう事なんだろう？どうしてこんなにたくさん女性用のものが・・・」

慧「どう思う？露漑」

露漑「うーん・・・」

突然、ドアチャイムが鳴る。

星華「誰だろう？」

露漑「とりあえず出てみて」

星華「はい」

ドアを開ける星華。

すると見知らぬ男が立っている。

星華「どなたですか？」

鹿島「どうも、私こういうものでして」

星華「・・・警察？」

鹿島「ちよつとお話伺ってもよろしいですか？」

星華「何でしょうか？」

露漑「愛内さん、大丈夫ですか？」

鹿島「あれ？露漑、お前こんな所で何やってるんだよ？」

露漑「え？鹿島さん？鹿島さんこそ何の用ですか？」

鹿島「なんだじゃねえだろ、国家公務員に向かつて」

慧「どうした？わ、出た！」

鹿島「出たとはなんだこの野郎、人をオバケみたいに」

慧「お化けのがよっぽどましだったっーの」

鹿島「なんだと？」

露濤「まあまあ鹿島さん、それで、何か？」

鹿島「何か？じゃねえぞ、お前ら。場合によっちゃ参考人でしょつ引くぞ」

慧「おいおい、警察が善良な市民脅さないでくれよ」

星華「警察がどんなご用ですか？」

鹿島「君は？」

星華「ここは僕の兄の家です」

鹿島「お兄さん？お姉さんではなくて？」

星華「兄です。もしかして、行方不明者の捜索してくれてるんですか？」

鹿島「いや・・・女性の飛び降り自殺がありましてね。その遺体の身元を捜査中です」

露濤「飛び降り自殺？」

慧「女の？」

鹿島「身元を証明するようなものは何もなかったんだが、ポケットからある店のポイントカード出てきてな」

露濤「ポイントカード？なんの店だったんですか？」

鹿島「そんなこと簡単に教えられるかよ」

慧「ちえ」

鹿島「店の顧客リストをしらみつぶしにあたってきたら、お前らがいた。これはただの偶然か？」

露濤「さあ」

鹿島「おい、何か知ってるのか？知ってるなら全部教える。さもねえと、任意同行じゃ済まねえぞ」

慧「何も知りませんよ」

露濤「鹿島さん、その店の名前って？」

鹿島「うーん、あ、いい事思いついた！教えてやってもいいが、条件がある」

露濤「条件？・・・わかりましたよ、で？その店の名前は？」

鹿島「ホストクラブ、ジュリエットだ」

転換 M

●第二幕 潜入

ホストクラブ“ジュリエット”。開店前の掃除をする新米ホストの日暮。

日暮「ふふふん♪よし、今日も頑張るぞ！」

そこにチーフのホスト、夜風がやってくる。

夜風「おはよう」

日暮「あ、おはようございます、夜風さん！」

夜風「お前はいつでも元気だな」

日暮「元気だけが取り柄ですからね」

夜風「良く分かってるじゃないか」

日暮「ひでーなー、そこは否定してくださいよ」

夜風「(笑)冗談だよ。最近のお前は良くやってる。ぽつぽつと指名も入ってるみたいじゃないか」

日暮「まだ一人ですけどね」

夜風「誰だって初めはそんなもんだ。だけどな、そうやってひとりひとり、少しずつでいから頑張って行けば、お前は必ず良いホストになれる。俺はそう思う」

日暮「本当ですか！？ありがとうございます！俺、頑張ります！もっともっと頑張って、絶対ナンバーワンホストになってみせます！」

夜風「(笑)頼んだぞ」

日暮「はい！」

夜風「ところで、麗人さんはまだか？」

日暮「あ、麗人さんはまだ寝てるはずです。昨日、貴子さんの誕生日だったから。もちろん麗人さんご指名だったので大盛り上がりでしたよ」

夜風「貴子さんの誕生日か。じゃあ大変だったな。だけど売上すごかっただろ？」

日暮「いや、すごいなんてもんじゃないですよ、ドンペリゴールド10本ですよ、あんなシャンパンタワー見たの始めてです」

夜風「(笑)俺も見なかったな」

日暮「あ・・・警察のほうはどうでした？」

夜風「さあな。俺は顧客リストを持って行っただけだから。自殺した女の身元を割り出すための情報が、女が持っていたうちの店のポイントカードだけらしい」

日暮「へー・・・でも、どうして自殺なんかするんですかね？人生、楽しい事ばかりなのに」

夜風「そうでもないさ」

日暮「・・・え？」

夜風「誰だって、人にはわからない苦しみってものがある。死ぬほど苦しいことが・・・」

日暮「・・・夜風さん？」

そこに麗人が出勤してくる。

麗人「おはよう」

日暮「あ、麗人さん！おはようございます！」

夜風「おはようございます、麗人さん。昨晚はお疲れさまでした」

麗人「ああ、貴子さんか？たいしたことないさ、ざっと400万ほどだ」

日暮「ひえー！400万！どっからそんな大金が！？俺なら牛丼何倍食えるんだ！？」

麗人「日暮」

日暮「はい！・・・なんででしょうか？」

麗人「お前、いつになったら分かるんだ？金にビビったら俺たちの商売は負けだ」

日暮「そうでした・・・すみません・・・」

麗人「金なんてのは所詮、人間が生み出した、物を交換するための道具なんだよ。だが俺たちが提供するのとは物じゃない、サービスだ。心って言う名のな」

日暮「はい」

麗人「心につける値段なんかあるわけがない。俺の心を受け取った人が、出来る限りの方法で俺に感謝を表してくれる。それが結果としての金額だ。高い安いじゃない。その人の精一杯なら、俺はいくらだろうと満足だ。違うか？夜風」

夜風「おっしゃる通りです。麗人さん」

日暮「ありがとうございます、麗人さん。お疲れなのに、俺なんかそんな素晴らしい話を・・・」

麗人「勘違いするな。俺が疲れることなんて無い。俺は酒と女が好きなだけだ」

夜風「麗人さん」

そこに露漉が入ってくる。

露漉「あの一、お取込み中すみません。面接に来た葉山と申しますが、ホストクラブ・ジュリエットってこちらですよね？」

夜風「あ、葉山露漉さんだね。こちらへどうぞ。履歴書持ってきた？」

露漉「はい。へー、ホストクラブってこんな感じなんですね」

麗人「ちよつと出て来る。8時には戻る」

夜風「わかりました。行ってらっしゃい」

露漉「よろしくおねがいします！」

露漉の事務所。

露漉「しかし、驚いたなあ、自殺した女性が愛内長閑、依頼人、愛内星華の兄だったなんて。警察は男だつてすぐに分からなかったんですか？」

鹿島「最近の手術はそりゃあ見事なものらしくてな。検視官も手こずちまったようだ」
露漉「ジュリエットのポイントカードの発行日は半年前。愛内長閑が実家から独立した時期と一致してる。女装してホストクラブに通いながら、ついに一月前、本当の女性になったつて事か。長閑もきつと昔から自分の性別について悩んでいたんだろ。可愛そうに」

慧「連絡が取れなくなったのは、性転換の手術で入院をしていた時期だったんだな」

露漉「ところが性転換はしたけれど、悩みは尽きることなく、ついには自殺を凶つたつてことですかね？」

鹿島「ところがそうとは言い切れねえんだよ」

慧「自殺じゃないつてこと？」

鹿島「ああ。飛び降りた屋上の柵に、争つたような跡が見つかったんだ。愛内長閑の爪からも柵に塗られた塗料が出てきた。彼女は、いや彼か？何者かに自殺と見せかけて殺された。俺はそう睨んでる」

慧「星華くんはなんて？」

露漉「本当の事が知りたいつて。お兄さんが性転換をしたことはショックだったみたいだけど、それよりも死んだ本当の原因が知りたい、そう言つてた」

慧「調査続行だな」

鹿島「それで、うまくいったのか？」

露漉「まあ、なんとか採用にはなりましたよ。明日から出勤します」

慧「しかし、警察が一般人に潜入捜査を強要するつて、問題じゃないですかあ？」

鹿島「おい、人聞きの悪い事言うんじゃねえよ、誰が強要したつて？俺は協力を要請しただけだ。俺はお前らに貸しがあるからな」

慧「1年も前の話持ち出して良く言うよ、だいたい監禁された善良な市民を助けるのは警察の仕事でしょ？」

鹿島「馬鹿野郎！なにが善良な市民だ！無鉄砲にヤクザとやり合つて、拳銃の果てにとつつかまつて、お蔭でこっちはな、二発も銃弾喰らつたんだぞ！？」

慧「それは鹿島さんがどんくさいから」

鹿島「なんだと、江口、てめえ国家反逆罪でぶち殺すぞ！」

慧「戦前の特高警察かつつーの！やれるもんならやつてみる！」

鹿島「きさまー！」

露漉「あー、やめやめ！くだらないな、もう！」

鹿島「ふー、ふー・・・こそ」

慧「ペー！」

露濤「とにかく、もう始まつちやったら潜入は続けますよ。星華くんの望みでもあるし」
慧「そうだな」

鹿島「よし、契約成立だ。あの店にはなんかある。気をつけろよ、露濤」
露濤「わかってます」

転換 M

●第三幕 欲望

半ぐれグループのアジト。机に足を乗せたボスの雷人。

雷人「兄貴、店に警察が来たんだって？」

麗人「ああ・・・だが心配ない。やつらは自殺した女の身元を調べてるだけだ」

雷人「本当か？」

麗人「本当だ。問題ない」

雷人「だけど、死んだ女は兄貴の客だったんだろ？困るんだよな。警察なんかにうるちよろされるとさ」

麗人「わかってる。大丈夫だ」

雷人「俺が流してるクスリを使って、客の女たちを虜にしてるなんて知れたら、兄貴だって一巻の終わりだぜ」

麗人「そうだな」

雷人「兄貴が常にナンバーワンホストでいられるのは誰のおかげだっけ？」

麗人「お前のおかげだよ、雷人」

雷人「分かってくれて嬉しいよ、兄貴。兄貴の客はいっぱいクスリを買ってくれるからな、俺もすげえ助かってる。これからも兄弟仲良くやっていかないと。な、そうだろ？」

兄貴「

麗人「ああ・・・そうだな」

雷人「よし。おい、シエクスピア。ちょっと来い」

雷人の部下のシエクスピアが来る。

シエクスピア「はい、何かご用ですか？」

雷人「こいつを知ってるよな？兄貴」

麗人「ああ。お前の第一の親衛隊だろ？」

雷人「こいつは俺の為なら何でもする。いいかい？今日からしばらく、こいつは兄貴のそばを離れない」

麗人「何をするんだ？」

雷人「別に。ただそばにいて、兄貴にとってまずいことが起きないか見張っているだけだ。大丈夫、仕事の邪魔はしない」

シェイクスピア「宜しくお願いします。麗人さん」

麗人「・・・わかった。じゃ」

雷人「じゃあな、兄貴」

麗人「そういえば・・・お義母さんの命日が近いんじゃないかあったか？」

雷人「へー、さすがだねえ、兄貴は義理堅いね。俺はすっかり忘れてたぜ。なんせ俺の母ちゃんは妾だからな。本妻の坊ちゃんに心配してただかなくても結構だぜ。あん？」

麗人「そうか・・・余計な事だったな」

出ていく麗人。

雷人「何が命日だよ。サツにぼろ出しそうだったら、殺れ」

シェイクスピア「はい、わかりました」

出ていくシェイクスピア。

転換 M

ホストクラブ“ジュリエット”深夜1…00。

日暮「なんか最近、店暇っすね」

夜風「そうか？麗人の客は来てるぞ」

日暮「麗人さんは特別っすよ。雨が降ろうが槍が降ろうが、客足が途絶えたことなんてないんですから。本当にすげえよなあ」

露漉「そんなにすごいんですか？」

日暮「わ、いたの？脅かすなよ」

露漉「すみません。ほら僕、入ったばかりで指名もないから、時間がある時はみなさんに色々教えてもらいたいなあと思って」

夜風「それはいい心がけだな。で？何が聞きたい？」

露漉「そうですねえ、お客様のハートの射止め方！とか聞きたいです」

日暮「そんなもんあったら俺が先に知りたいよ。でも、あるんですか？何か秘訣みたいなものって」

夜風「おいおい、お前もか？」

日暮「いいじゃないですか？夜風さん、お願い！」

夜風「フツ。そうだな、秘訣というか麗人さんに最初に言われたことはな」

二人「うん、うん」

夜風「80%の関係を作れ」

日暮「80%の関係？なんですか？それ」

夜風「与えるのも、もらうのも残り20パーセントを残せっていうんだ。つまり、一時に完結しないで、また次があるっていう関係を築くって事かな。何度でも足を運んでもらわなけりゃいけない商売だからな」

露漉「恋愛みたいですね？」

夜風「当たり前だろ？ここにあるのは疑似恋愛の世界だ。一夜限りのな」

日暮「前にお客さんが言っていました。一夜の恋だから楽しいって。知りたいけど知らないことが多いほうが燃えるって」

露漉「ミステリアスってやつですかね？」

日暮「麗人さんなんて、まさにミステリアスの王様だもんな」

夜風「確かなな・・・あの人は分からないことが多すぎる・・・」

日暮「夜風さんにもあるんですか？麗人さんの知らないこと」

夜風「・・・おっと、お客様だ。いらっしやいませ！」

客を出迎えに行く夜風。

日暮「俺も」

露漉「日暮さん、もうひとつ聞いてもいいかな？」

日暮「いいけど早くしてくれよ、夜風さんのヘルプ取られちゃう」

露漉「ごめん、すぐ済むから」

日暮「なに」

露漉「この間自殺したお客さんて、誰のお客さんだったか知ってる？」

日暮「なんでそんなこと聞くんだよ？」

露漉「いや、ほら、他のお客さんも気にしてるみたいで、聞かれたときに変な返答しちゃうとまずいからさ」

日暮「ああ・・・麗人さんだよ」

露漉「麗人さん・・・そうか」

日暮「もういいだろ？はい、夜風さん、すぐ行きます！」

ヘルプに向かう日暮。

露漉の携帯のバイブがなる。

露漉「ん？慧か」

暗転

店の裏の路地。遠い喧噪。

野良猫が鳴きながら通り過ぎる。

露漉「本当か？それ」

慧「ああ。どうやらこの店で、クスリをさばってる奴がいるらしい」

露漉「誰だかわかったのか？」

慧「一条麗人。この店のナンバーワンホストだ」

露漉「麗人？なんだってナンバーワンホストがクスリなんか」

慧「逆だよ」

露漉「逆？」

慧「ああ。一条は薬を使って女を操ってるらしい。まあ、ただの売人ってわけじゃなく、一緒に楽しむふりをして女から金をむしり取ってるのさ」

露漉「警察は？」

慧「もちろん以前からマークしてる。一条の弟がクスリの元締めだ」

露漉「弟がいるのか」

慧「一条雷人。雷神（らいじん）っていう半ぐれグループのリーダーで、なんでも麗人とは腹違いの兄弟らしいが詳しいことはわからない。ただ、ぐれて問題ばかり起こす義理の弟を、兄は事あるごとに庇っては面倒みて来たらしい」

露漉「ミステリアスがひとつ剥げたか」

慧「なに？」

露漉「いや」

慧「それで、お前の方は？」

露漉「ああ。死んだ愛内長閑は一条麗人の客だった」

慧「つながったな。じゃあ、死んだ愛内長閑も麗人によってクスリ付けにされてたってことか。それが原因で自殺に見せかけて、麗人に殺された」

露漉「おそろくな。痴情のもつれからクスリの事をばらすとかなんとか言われたんだろう」

慧「実行犯は弟の方かもしれないけどな・・・どうする？まだ続けるのか？」

露漉「ああ。真相をはっきりさせないと、成功報酬が手に入らないからな」

慧「まあとにかく気をつける・・・なんだ？あんた」

暗闇から現れたシヤクスピア。

シエイクスピア「それ以上探るのはやめる。さもないと命は無いぞ」

露濤「・・・どうということだ？」

シエイクスピア「いいから手を引け。ここに100万ある。これをもってさっさと消えろ」

慧「おいおい、100万なんかで俺たちが・・・おい、露濤、どう考えても星華くんの報酬より多そうだけ。危ない橋は渡らないで、手を打つか？」

露濤「馬鹿、このまま真実を闇に葬れって言うのかよ？鹿島さんには何ていうんだよ？」

慧「知るか、あんなクソ刑事！捜査を俺たちに押し付けて、今ごろ赤ちようちんでクダまいてるに決まってるんだ」

露濤「たしかに・・・いや駄目だ！一度引き受けた仕事は必ずやり遂げる」

シエイクスピア「どうした？早くしろ。早くしないと、殺しちゃうよ。クッククック」

そこに鹿島が現れる。

鹿島「なんだ、もめごとか？面倒くせえから俺のいない夜にやってくれ」

慧「よ、クソ刑事」

鹿島「なんだと！？」

シエイクスピア「チッ」

去っていくシエイクスピア。

鹿島「露濤、定期連絡。ハウ・レン・ソウは？」

露濤「なにもんだ？あいつ・・・」

転換 M

●第四幕 呪縛

雷人のアジト。夜風が来ている。

雷人「今日が期限ですよ、夜風さん。持ってきてくれたんでしょね？約束の500万」

夜風「・・・すまない、もう少しだけ待ってくれないか？金は必ずなんとかする」

雷人「なんとかする、なんとかするって、何か月待たせるつもりですか？兄貴の後輩だから便宜図ってきたつもりですけどね、こっちももう限界ですよ。今日中に何とかしてください。そうじゃなきゃ、兄貴にちくりますよ？」

夜風「待ってくれ！それだけはやめてくれ！頼む・・・麗人さんにだけは・・・」

雷人「じゃあ、どうすんだよ、500万！？貸した金返せねえなら、腎臓でも目ん玉でも売って金作ってこい！こっちは慈善事業じゃねえんだぞ！」

夜風「分かった！今日中に・・・今日中に何とかする・・・だから麗人さんには・・・」

雷人「あのさ、新しいホストが入って来ただろ？」

夜風「え？・・・ああ・・・露漉のことか？」

雷人「そいつはさ、警察の犬だぞ」

夜風「え！？どういう事だ？」

シェイクスピア「昨日、葉山露漉ってやつが店の裏で、仲間と話をしてるのを聞いちゃいましたね」

夜風「・・・何の話を？」

シェイクスピア「麗人さんが店の客を殺したって言ってましたよ」

夜風「なんだと？」

シェイクスピア「例の自殺した女、麗人さんの客だったんですよ？愛内長閑って言いましてつけ？痴情のもつれから、麗人さんが自殺に見せかけて殺したって、そんな話をしてました。クツクツクツ」

雷人「どうなの？本当に兄貴がやったの？」

夜風「・・・馬鹿な・・・麗人さんはそんな人じゃない・・・」

シェイクスピア「それから、実行犯はこの雷人さんかも知れないとも言っていました」

雷人「聞いた？やつてもいない殺しの犯人にされたんじゃないぜ」

夜風「どうしたらいいんだ？」

雷人「とりあえず、その葉山露漉ってやつを見張ってる。何かあったらすぐ教えるんだ。なんにしても、店の中を嗅ぎまわれたんじゃないや、あんただって気持ちよくなるはないだろ？」

夜風「・・・ああ」

雷人「わかったらさっさといけ。500万は大金だぞ（大笑）」

雷人の嘲笑の声を尻目に、出ていく夜風。

転換 M

閉店後のジュリエット。

夜風「みんな、今日もお疲れさまでした」

みんな「おつかれさまでした！」

夜風「今日は美鈴さんのお誕生日会という事で、いろいろ大変だったと思いますが、みんなの協力のおかげで、なんと350万の売上を達成することが出来ました」

歓声を上げるホスト達。

夜風「先週から美鈴さんの指名を受け、今日のパーティーを見事に仕切って成功させた日暮れから一言」

日暮「えー！？俺つすか・・・まいったな、こういうの慣れてないから・・・(咳払い)えー、ただいまご紹介に預かりました葬町日暮です！」

露漉「知ってるよー！」
みんな「(笑)」

日暮「ははは、そうですね・・・えーと、今日は初めてのパーティーの幹事で朝からすげえ緊張してましたが、なんとか無事に終えることが出来てほっとしています。それも全て、未熟者の俺をバックアップしてくれた諸先輩方のおかげだと思っています。本当にありがとうございます。これからも葬町日暮、葬町日暮をよろしくお願い致します！」

露漉「選挙じゃねえぞー」
みんな「(笑)」

夜風「それでは、麗人さん、お疲れの乾杯の音頭お願いします」

麗人「日暮、お疲れ。それから、初幹事、おめでとう。もともとは俺の顧客だった美鈴さんが、先週から日暮を指名するようになって正直すこしびっくりしたが、美鈴さんは開店当初からずっと、この店を可愛がってくれている恩人だ。だからきつと、若い日暮をホストとしても人間としても育ててくれようとしているような気がして、俺はとても感謝している。これからお客様の事を第一に考えて、みんなで力を合わせてこの店を、ホストクラブジュリエットを盛り上げていこう。今日は本当にお疲れ様。乾杯！」
みんな「乾杯！」

暗転

閉店後のジュリエット。全員帰り静まり返った店内。

日暮と露漉が戻ってくる。

日暮「ういつ、あれ？誰もいない・・・くー、メチャクチャ飲んだな！」

露漉「ほんと、ほんと、こんなに酔っぱらったのひっさびさっす！」

日暮「たまにはいいな、店の外でみんなで呑むのも。それにしてもお前、歌うめえじゃ？カラオケとか良く行くのか？」

露漑「これでも高校時代、バンドでボーカルやってたんだ」

日暮「へー、かっけえ。でも、お前、声高くな？歌うとなんか女みてえ」

露漑「そ、そうか？ははははは、良く言われる」

日暮「誰が一番好きなの？歌手とか、ボーカルとかで」

露漑「フレディ・マーキュリー」

日暮「おう、クイーンね！知ってる知ってる。でもあいつ、あっちだろ？」

露漑「いけねえかよ」

日暮「え？・・・」

露漑「いけねえかって聞いてんだよ！？」

日暮「いけなかねえよ・・・なんだよ急に怖い顔して・・・」

露漑「あ、うそうそ、いやー、酔ったなあ、ははははは」

日暮「なんかもう帰るの面倒くさくね？その辺で寝ちまおうか？ふあゝ、もう限界」

露漑「そうだな、そうすつか・・・」

部屋の隅のソファアで寝てしまう二人。

夜風が戻ってきて、売上金を勘定し始める。

夜風「100, 200, 300・・・352万か・・・150万足りない・・・」

シェイクスピアが入ってくる。

シェイクスピア「どうですか？売り上げをくすねる決心は出来ましたか？クッククク」

夜風「どこから入ってきた・・・駄目だ、150万足りない」

シェイクスピア「雷人さんは待つてはくれませんよ。あの人は約束にはうるさい人だ。今日中に500万、耳を揃えて返さないと、どうなるかは保証できません」

夜風「分かってる・・・分かってはいるが」

麗人「500万がどうしたって？」

麗人が現れる。

夜風「麗人さん！・・・何でもありません」

麗人「ここに500万ある。店の金は金庫にしまえ」

夜風「麗人さん……」

麗人「訳は聞かない。黙ってこの金を使え。雷人は……俺を苦しめただけだ」
シェイクスピア「すみませんね、麗人さん。では、この金はもらっていきますよ。あんた、いい先輩を持ちましたね。クックククク、はっはははは……」

金をもって出ていくシェイクスピア。

麗人「金はいつでもいい。だから、おかしな考えだけは起こすなよ。お前も早く帰れ……
じゃ、おやすみ」

出ていく麗人。

夜風「……くそっ！」

日暮が起きてくる。

日暮「夜風さん？」

夜風「なんだ日暮、いたのか……もう帰れ、明日も仕事」

日暮「500万って何すか？」

夜風「え……」

日暮「500万も何したんすか？なんかやばくないすか！？」

夜風「お前には関係ない！」

日暮「でも！」

夜風「大丈夫だ！……心配ない。大丈夫だから……もう帰れ」

日暮「夜風さん……」

暗転

夜風N「あれは3ヶ月前のことだった。あんなことさえ無ければ……」

……回想……

開店中のジュリエット。3ヶ月前。

夜風「いらつしやいませ、長閑さん！すみません、生憎、麗人さんは別のお客様の接客中
で」

長閑「そうなんだ。まあ、しょうがないか、売れっ子だもんね、麗ちゃんは」

夜風「麗ちゃん？麗ちゃんて呼んでるんですか？麗人さんのこと」

長閑「知らなかった？麗ちゃんは私の事、小猫ちゃんって呼ぶのよ」

夜風「小猫？長閑と一文字もあってませんけど？」

長閑「馬鹿ね、まったく夜風ちゃんはマジメ一本なんだから。なんでもね、私がいつもゴロゴロニヤンニヤンってまわりつくからそう呼ぶんだって。僕の小猫ちゃんて」

夜風「さすがだなあ、麗人さんじゃなきや言えないですよ。見習わなくちゃな、ホストとして」

長閑「そうよ。でも夜風ちゃんには夜風ちゃんの良さがあるんだから。真面目なホストつていうのもそれはそれでいいわよ。ギャップ萌つていうのかな。アハハハハ」

夜風「昔から何事も杓子定規にしか考えられないんですよ」

長閑「生きてくためにはそれも大事よ。ひとつひとつ分析して、しっかり考えてから行動する。夜風ちゃん、向いてるかもしれないわね」

夜風「向いてる？向いてるって何にですか？」

長閑「知りたい？」

夜風「え？気になるなあ・・・秘密っぽい感じですけど、いったいなんなんですか？」

長閑「麗ちゃんには内緒よ」

夜風「はい・・・」

長閑「私ね・・・株やってるの」

夜風「株？株ってあの売ったり買ったりする株ですか？」

長閑「そう。しかも私ね、トレーディングで生計立ててるの。プロの個人トレーダー。すごいでしょ？」

夜風「へー、すごいなあ・・・毎日、株の売り買いだけしてるんですか？他に仕事したりしないです？」

長閑「そうよ。もともとは証券会社に勤めてたんだけど、会社を辞めて自分で始めたの。才能あったみたい。時には数千万単位のお金動かしてるわ。まあコンピュータの画面とにらめっこだから実感ないけどね」

夜風「いやあ、人は見かけによらないもんだなあ」

長閑「見かけによらないって、私、夜風ちゃんにはどういう風に見えるわけ？」

夜風「それはもう、綺麗で可愛くて、おちゃめで、それでいて優しそうで、理想のタイプですよ、俺にとって」

長閑「本当？夜風ちゃん！」

夜風「本当ですよ、俺は嘘は付けない性質（たち）なんで、ははは・・・あ、麗人さん空いたみたいです、呼んできますね」

長閑「いい！・・・今日はもういいわ」

夜風「え？・・・でも」

長閑「いいの……なんだかもっと夜風ちゃんと話したくなっちゃった……家に来ない？」

夜風「家？……長閑さんのですか？」

長閑「うん……いや？」

夜風「そりゃ、いやじゃないけど……」

長閑「じゃあ行こ」

夜風「……はい」

暗転

長閑のマンション。

長閑「何飲む？」

夜風「じゃあ、ビールを」

長閑「OK……はい、どうぞ。カンパイ」

夜風「……すごい部屋ですね。これも株で」

長閑「そうよ。高層階で都会の夜景を見ながら好きな男性とお酒を飲むのが、私の夢だったの」

夜風「……麗人さんもここに？」

長閑「いいえ、夜風ちゃんのはじめてよ」

夜風「本当ですか？なんだか緊張するな……」

長閑「夜風ちゃんは夢とかないの？」

夜風「俺の夢ですか？……俺はいつか自分の店が持ちたいです」

長閑「ホストクラブ？」

夜風「何でもいいんですけど、ホストでもバーでも居酒屋でも。客商売が好きだし、もう

昼間の生活には戻れないですしね」

長閑「朝起きれないか？」

夜風「たしかに」

笑い合う二人。

少し酔った様子の二人。

長閑「出せば？お店」

夜風「え？無理だよ、まだ全然貯金なんてないもの」

長閑「増やせばいいじゃない」

夜風「どうやって？」

長閑「株だよ」

夜風「株で？そんな急に株の事なんてわからないし、失敗したら元も子もないじゃないか」

長閑「私に預けなさいよ。そうしたら必ず増やしてあげる」

夜風「預ける？長閑さんに？俺の金を長閑さんが株で増やしてくれるっていうの？」

長閑「そう。証券会社と一緒に。お客さんの資金を預かって運用して、増えたお金から手数料を頂くのが証券会社。つまりファンドよ。長閑ファンド。でも夜風ちゃんは特別、手数料はいらわないわ。夜風ちゃんの夢のお手伝いが出来たら嬉しいもん。それだけでいいわ」

夜風「長閑さん……」

長閑「店を出すには、そうね……最低1000万必要だとして、500万用意して。すぐに倍にしてあげる」

夜風「500万か……」

長閑「お金の話はこれくらいにして……ね？」

夜風「長閑さん……」

……

暗転

夜風「俺は500万円を借金して彼女に渡した。そしていつしか俺は、愛内長閑を本気で愛していた……」

転換 M

●第五幕 火花

慧「ここだな、あの薄気味悪い野郎の隠れ家は」

露濤「ああ。奴をつけてきて張り込んだ。まだ一歩も外には出て来てない」

慧「眠そうだな」

露濤「当たり前だろ、徹夜な上に、ひでえ二日酔いだ……」

慧「この雑居ビルの最上階に一条麗人の弟、一条雷人の事務所があるわけか」

露濤「外浦夜風は一条雷人から500万もの大金を借金していた。それを何故か、一条麗人が肩代わりした。あの500万はいったい何なんだ？何のためにそんな大金を」

鹿島が現れる。

鹿島「じゃあ、今からそいつを聞きに行こうぜ」

露濤「鹿島さん！」

鹿島「殺しの動機もそのあたりに隠されてそうじゃないか？行くぞ」

慧「あ、ちょっと待ってよ、鹿島さん！まったく勢いだけなんだから」

鹿島「なんか言ったか！？早く来い！」

露濤「行くぞ」

慧「おいおい、いいとこだけ持って行こうとしやがって、おい待てよ！」

ビルに入っていく三人。

暗転

雷人の事務所のドア前。

露濤「ここだ。奴はこの部屋に入って行った」

慧「しかし古いビルだな。よくも倒れず今まで。おい、早く来いよ、老いぼれ刑事」

鹿島「(荒い息)ふー、ひー・・・くそ、エレベーター無しで7階はさすがにきちいな・・・」

慧「運動不足。刑事なんだから日頃からもっと鍛えろよ」

鹿島「うるせえ！刑事の仕事は8割がたデスクワークなんだ、テレビや小説はウソばかりだ、知らないのか！？」

露濤「し！おかしいな、人の気配がない・・・ちつ、鹿島さん！後始末はよろしくね、おりゃ！」

ドアを蹴破って突入する露濤。

鹿島「馬鹿野郎！令状もねえのに！おい！」

露濤「くそっ！誰もいない」

慧「もぬけの殻だ！逃げられたか！？」

鹿島「・・・おい、どうだ？何かあったか？」

露濤「いや、大事なものは持ちだしたようですね」

慧「探ってるのを悟られたか。鹿島さんがでっかい図体でうろろするからばれたんですよ！」

鹿島「なんだと！？お前らの調べ方が悪いから」

露濤「ちよっ待って、留守電が光ってる」

鹿島「ホントか？よし聞いてみる」

留守電の再生ボタンを押す。

留守電のメッセージ「一件のメッセージを再生します（電子音…プー）…雷人、俺だ。今日だが、午後の3時で大丈夫だ。クスリはあるだけ持ってきてくれ。じゃ」

慧「クスリをありったけって…売人か？」

鹿島「誰だ？覚えあるか？」

露濤「ああ…兄の一条麗人だ」

鹿島「なんだと！？今何時だ！？」

露濤「2時40分！」

鹿島「くそ、急げ！」

部屋を飛び出し、階段を駆け下りていく三人。

鹿島「現場を押さえれば、麗人が弟から仕入れてるクスリを店の客に売りつけて、口封じに顧客を殺害したことが立証できる！」

露濤「先行くぜ、鹿島さん！」

鹿島「こら、また追い抜きやがって！」

慧「なる早でよろしく！」

バイクで走り去る露濤と慧。

鹿島「荒い息）ふー、ふー…（携帯で電話する）俺だ、至急ホストクラブ・ジュリエットに応援をよこしてくれ。ただし、俺が行くまで手を出すなよ、わかったな。さて、仕上げと行く。おい、タクシー！」

転換 M

開店前のジュリエット。一人、待つ麗人。

そこに現れる雷人とシェイクスピア。

麗人「来たか」

雷人「待たせたな、兄貴。誰もいないのか？」

麗人「ああ。仕事は朝までだからな。みんなが来るのは夕方からだから安心しろ」

雷人「ずいぶん気前がいいじゃないか、俺が持つてるクスリを全部買い上げてくれるなんて。いくら兄貴とはいえ、ざっと5000万はかかるぜ。いいのかよ？」

麗人「ああ、かまわない。持ってきたか？」

雷人「おい、シェイクスピア」

シェイクスピア「はい。どうぞ、こちらです」

麗人「・・・小切手だ。なるべく早く早く換金しろ」

雷人「わかってる。正直、俺も助かるよ。どうやらサツが嗅ぎまわってるみたいでさ、しばらく静かにしようかと思ってたところなんだ」

麗人「そうか・・・雷人」

雷人「なんだ？」

麗人「もう、足を洗えないか？もう十分稼いだろう、金が必要なら俺がいくらでも用立てる。だからクスリも闇金もやめて、残りの人生を真っ当に」

雷人「まだだね！まだまだだよ、兄貴。だってそうだろ？俺の不幸とあんたの不幸はまだ釣り合っていない。同じ親父の子供として生まれたのに、どうしてこんなにも差があるんだ？あんたの母親が本妻で、俺の母親が妾だからか？いや、そんなことは生まれてきた俺には何の責任もない！断じてな！」

麗人「雷人・・・」

雷人「俺たちの父親はどういうわけか、母親たちが知らないところで俺たちを一緒に遊ばせたりした。多分、自分の会社を継ぐのにふさわしいのはどちらか比べていたんだろう。お互い他に兄弟もいなかった俺たちは仲良くなった。確かにあんたは優しくしてくれた。本当の兄貴みたいにな。だがな、結局親父はあんたを選んで、俺をほっぽり出したんだよ！母ちゃんも一緒に、まるで粗大ごみでも捨てるようになって！」

麗人「だが俺は親父の会社は継がなかった。親父の言いなりになるのが嫌だったし、お前への仕打ちも我慢できなかったからだ。だからこうして今でもお前のために」

雷人「恩着せがましいんだよ！俺の心配するような顔して、本当はいつでも俺を見下してる。反吐が出るんだよ！親父と同じ目で俺を見やがってよ！俺は許さねえ、お前も親父も。俺がどうして一条の姓を名乗ってるか分かるか？俺がどえらい悪人として捕まった日にゃ、一条の名が地に落ちるからさ。どうだ、すげえだろ！？はっはははは！・・・だがよ、俺が捕まる前に兄貴自ら、その役目を果たしてくれそうだな」

麗人「何のことだ？」

雷人「今さら白を切るなよ。殺したんだろ？店の客を。どうしたんだ？クスリ潰けにして貢がせたら、駄々でもこねられたのか？全部ばらすとか言っただけで脅されてよ。馬鹿だな、殺すなら俺に相談すりやよかったのに。なあ、シェイクスピア？」

シェイクスピア「ええ。私がお手伝いしましたのに」

麗人「彼女は自殺したんだ。それに・・・」

雷人「それに？なんだよ」

麗人「俺は、客にクスリを売ったりはしていない」

雷人「なんだと？じゃあ、いったい誰に」

麗人「誰にも。お前が俺に渡したクスリは全て、トイレやシンクに流して捨ててきた。このクスリもそうする。だからもうやめろ。お前がいくら悪事を働いても、俺はその都度邪魔をする。雷人・・・お前は俺の弟だからな」

雷人「ふざけるな！調子の良い事ぬかすんじゃないやねえ！ああ、面白えじゃねえか！そんなに俺を救いてえなら、死ぬよ！目障りなんだよ！ほら、このナイフでてめえの喉搔っ切って、死んでくれよ！」

麗人「・・・分かった・・・それで気が済むんだな？正直俺も疲れたよ・・・俺はな、お前のお義母さんに言われたんだよ、死ぬ間際の病室で」

雷神「・・・なにをだよ・・・母ちゃんが何を言ったっていうんだよ」

麗人「雷人をお願いしますって・・・俺はお前の母親に頼まれたんだ。あの子が人様に迷惑をかけるような事があつたら止めてくれて。あの子は本当は優しいいい子だからって、そう言っていた」

雷人「嘘だ！」

麗人「嘘じゃない！・・・だからもうやめよう。お母さんの願いを聞いてやれ」

雷人「母ちゃんの話はやめろ！やめねえと」

露濤が現れる。

露濤「おはようございませーす！・・・あれ？なんかお取込み中ですか？」

シェイクスピア「てめえ、手を引けって言っただろうが？マジで殺すぞ」

露濤「手を引く？いったい何の話？俺はただ早めに出勤して、掃除でもしようかと」

麗人「露濤、お前、何者だ？」

露濤「俺？俺はですね、探偵です」

シェイクスピア「探偵？警察の犬じゃねえのか？」

露濤「犬？見ての通り人間です」

シェイクスピア「殺す」

露濤「待つて待つて待つて！俺はただ真相を探りに来たんですよ。愛内長閑さんの死の真相をね。麗人さん・・・あなたが殺したんですか？」

麗人「・・・」

慧が鹿島たち警察を連れて入ってくる。

慧「鹿島さんこっちこっち！」

鹿島「そこまでだ！誰も動くな！麻薬取締法違反の現行犯で逮捕する！」

シェイクスピア「くっそ！喰らえ！」

銃を発射するシェイクスピア。

鹿島「痛！！てめえ！」

腹に命中し、応戦して発砲する鹿島。

腕に銃弾を喰らい、観念するシェイクスピア。

シェイクスピア「つぐ！・・・くっそー！」

露濤「鹿島さん、大丈夫ですか！？」

鹿島「くー、いててて。防弾チョッキ着て来てよかったー！」

慧「ヒヤツとさせんなよ」

鹿島「ふふふ、そうそう喰らってたまるか」

雷人「兄貴・・・塀の中で会えたらいいな。ふっ・・・ふあっははははははは！！」

連行されるシェイクスピアと雷人。(警官モブ)

驚いた様子で入ってくる夜風と日暮。

夜風「どうしたんだ、いったい・・・おい、露濤、これは？」

日暮「麗人さん大丈夫ですか？何があったんですか？」

鹿島「一条麗人、麻薬所持、及び殺人の容疑で逮捕する」

露濤「麗人さん、答えてください。本当にあなたが愛内長閑さんを殺したんですか？」

麗人「・・・ああ、俺がやったんだ」

夜風「麗人さん・・・」

鹿島「もういいだろう、露濤。行こうか」

麗人「はい・・・」

鹿島に連行されていく麗人。

日暮「おいちょっと、待てよ！麗人さんをどこに連れてく気だよ！おい、お前ら（突き飛ばされる）痛！・・・いてててて、おい、露濤、お前何か知ってるのかよ！言えよ！ちゃんと説明しろよ！」

露濤「・・・麗人さんが顧客の愛内さん殺害を自供したんですよ」

日暮「なんでお前がそんなこと・・・お前、まさか俺たちを騙して・・・この野郎！」

夜風「日暮！・・・やめろ」

日暮「夜風さん、でも・・・」

露濤「夜風さん、日暮さん、黙ってて悪かった。俺は事件を探るためにこの店に潜入した探偵です。ホストの仕事、結構楽しかったけど、今日で終わりだな。もちろん給料はいりませんよ。たいして無いと思いいけど。失礼します、行こう」

慧「悪かったな、坊主。しつかりやれよ」

日暮「つく！ばかやろー！・・・」

夜風「・・・」

●第六幕 真実

露濤N「次の日、ジュリエットの外浦夜風が、愛内長閑は自分が殺したと警察に自首をしてきた」

警察の取り調べ室。

鹿島「つまり、あなたは愛内長閑と恋愛関係にあったということだな？」

夜風「・・・いえ、好きだったのは俺の方だけだったんです・・・最初は店のお客さんとして接していたんですが、関係が深まるにつれて徐々に好きになっていきました」

鹿島「本当は男性だと気付いてからも？」

夜風「・・・はい、それでもかまいませんでした」

鹿島「そして、店を出す金を作るために一条雷人から金を借り、愛内長閑に預けたんだな。株で増やしてもらおうと」

夜風「はい」

鹿島「しかし、彼女、いや彼か？まあいい、愛内さんが投資に失敗して、自分の預けた金が消えてなくなったと知り逆上して殺した。そういうことか？」

夜風「・・・いいえ・・・違います」

鹿島「じゃあなぜ殺したんだよ？」

夜風「・・・それは・・・」

転換

・・・回想・・・

真夜中のビルの屋上。

長閑「しょうがないじゃない！まさかあの会社が倒産するなんて知らなかったんだから！」

夜風「だけど大丈夫だって、ぜったい大丈夫だって言ってたじゃないか！それを今さら、元金すべて無くなったなんて、そんなのあんまりじゃないか！どうするんだよ！？あの金は闇金に借りたんだぞ！返せなかったら大変な事になる・・・」

長閑「でも麗ちゃんの弟なんでしょ？その闇金」

夜風「それとこれとは別だよ。あの雷人っていうやつ、そうとうやばいらしいし、隣にはいつもシェイクスピアって手下も従がえてて、そいつなんかまるで悪魔みたいで・・・どうしよう、殺されちゃうよ！金返せなかったらきつと俺、奴らに殺されちゃう・・・そうだ、なあ、長閑、一緒に逃げよう！頼む、もう俺はお前がいなくちゃ駄目なんだ！一緒にどこか遠くに逃げてくれ！この通りだ！」

長閑「やめてよ！あんた男の意地とかないの！？簡単に土下座なんかして。嫌よ、私はどこにも行かないわよ。やつと高級なマンションも手に入れて、性別も変えてこれから自分の人生を謳歌できるっていう時に、どうしてあんたのために人生棒に振らなきゃいけないのよ！？」

夜風「そんな・・・あんまりだ・・・愛してるんじゃないのか？店だって一緒にやろうつて言ってくれたじゃないか！？全部嘘だったのか！？」

長閑「嘘よ！全部嘘！あんたもホストやつてるなら嘘の世界で生き抜いてみなさいよ！確かに私だって、一緒に店を出して、一人前の女みたいに結婚して、幸せな家庭を築いてみたいと思っただよ、でもダメ！だって全部嘘だもの！・・・無理なのよ、私たちみたいな嘘の世界の住人が本当の幸せを手に入れるなんて・・・はじめから無理な話だったのよ！あつははははは、可笑しい！馬鹿みたい、諦めましょ、もうサヨナラよ・・・消えて！余計な夢なんか見ないで麗ちゃんと遊んでた頃に戻りたいわ。麗ちゃん、どうしてるかな・・・」

夜風「麗ちゃん、麗ちゃんて・・・俺はお前の何だったんだー！？」

長閑「ちよつと何するのよ、やめて・・・やめ、くるしい・・・いや、はなして・・・」
夜風「嘘じゃない、嘘なんかじゃないぞ・・・俺はお前のこと、本気で好きなのに・・・畜生、ちくしょうー！」

長閑「いや、やめて、落ちる・・・お願い、助けて・・・いやー！・・・(ドサツ)」
夜風「荒い息遣い)はあはあ・・・ちくしょう・・・ちくしょうー！」

取調室。

鹿島「どうして自首してきたんだ？」

夜風「・・・麗さんに罪までかぶってもらったんじゃ、男として完全に俺の負けですからね」

鹿島「(ため息)」

●エピローグ

露濤の事務所。

慧「はい、お茶どうぞ」

星華「ありがとうございます」

露滯「大丈夫？」

星華「はい・・・本当のことを聞いて、とても辛かったですけど、分かって良かったです」
慧「お兄さんはお兄さんなりに、自分の人生を全うしたかったんだらうね。自分らしくさ」

星華「そうですね・・・もっと分かってあげたかったです、死んでしまう前に」

露滯「だけどお兄さんが生前遺書を残っていて、遺産相続人を君にしているのを知って驚いたでしょ？」

星華「はい。兄は家族や親戚の中でも、昔から孤立していて、話をするのが僕だけだったように思います」

慧「いきなり金持つとロクなこと無いから、俺が預かるうか？」

露滯「馬鹿、すいません」

星華「笑」財団にしようと思ってます。兄の財産は全部」

露滯「財団？」

星華「はい。性別の事で悩む人や、LGBTを応援する活動なんかを支援できるように。それも兄の意思なので」

露滯「へー、そうか。頑張ってるね」

星華「頑張ります」

慧「俺も応援する」

星華「ありがとうございます。それじゃ僕はそろそろ」

慧「そうか、じゃあ」

星華「さようなら」

露滯「さようなら」

星華が出ていく。

慧「いい子だったな」

露滯「だね。それじゃあ、行きますか？焼肉！」

慧「賛成！」

鹿島が入ってくる。

鹿島「おー、豪勢じゃないか！俺も連れてけ、焼肉」

露滯「すごいタイミングですね」

慧「どうせ外で様子伺ってたんだろ？」

鹿島「馬鹿野郎、俺を誰だと思ってるんだ？捜査の鬼、鹿島竜樹警部だぞ！」

慧「食い気の鬼の間違いでしょ！？行こ行こ、露滯」

露滯「あはははは、了解！」

出ていく露滯と慧。

鹿島「おい、ちょっと待て、コラ・・・露滯！」